学　校　便　り　　琢磨

第４号　R2.5.27　三豊市立詫間小学校

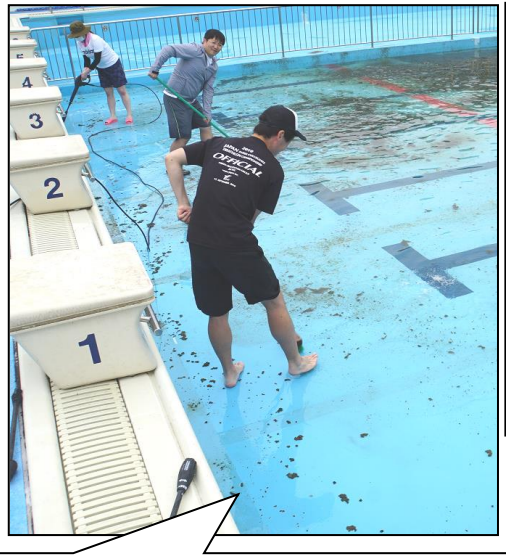
一昨日、緊急事態の全国解除が発表されました。本校でも分散登校が開始されてから今日で三日。五年生が登校し、これで全ての学年が一日は、登校して授業を実施したことになりました。

確実に、学校は再開に向けて進んでおります。

しかしながら、今後も感染拡大の危険性が無いとは言い切れません。三密を避ける「新しい生活様式」に留意し、充実した学校生活を送ることができるよう、最大限の努力をしてまいります。

今後とも、ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

校長　真鍋　佳樹



５月２６日。今年は、教職員のみでプール清掃を行いました。子どもたちが楽しみにしている水泳。できる日が、早く来ますようにと願いながら･･･。

５月２５日。１年生は、小学校生活初めての給食がありました。前を向いて、おしゃべりを控えた給食でした。にんじんサラダ、スープ、おいしかったね。

本校の新型コロナウイルス感染防止対策等について　その３

給食後の歯磨きについて

飛沫感染のリスクを最大限防止するため、給食後の歯磨きについては、５月２９日までの分散登校の間は、学校では原則一斉の歯磨きは実施しておりません。このことは、前回もお知らせしました。

６月１日からの対応については、現在、学校歯科医の指導を仰いでいるところです。

そこで、６月１日（月）～６月１２日（金）までの２週間は、学校では原則一斉の歯磨きは実施しません。その後の対応については、学校歯科医の指導のもと、どう対応するかを決定し、学校便りでお知らせします。

給食後の歯磨きが必要な場合は、他の児童との距離を保って歯磨きをするよう配慮しますので、学級担任までお知らせください。

今後の学校行事について

運動会や音楽会など、９月以降に予定されている大規模な学校行事につきましては、ＰＴＡの行事でもありますので、６月４日に開催される本部役員会、各部委員会で協議する予定です。本部役員会や合同委員会も、緊急事態宣言が出されていたことで、この日まで延期が続いておりました。

学校としては、本校の規模から考えると、運動会、音楽会は、数千人のイベントとなり、「三密」を避けることが難しい、学校の臨時休業により、教科等の学習を優先させる必要があり、行事、練習等に時間をかけることができない、学年団での練習においても 100 名近い規模となり、練習内容、練習方法に大きな制限がかかる等といった理由から、例年通りの実施は断念せざるを得ないと考えています。開催を中止することも視野に入れ、ＰＴＡ等との協議を経て方針を決定いたします。

決定しましたら、学校便りでお知らせします。

真鍋校長の独り言　その２

ベビーシッターに育てられた私

今から５５年以上も前の話です。私は、生まれてから幼稚園に入園するまでの間、ベビーシッターに育てられました。当時、保育所というものは、ありませんでした。また、すぐ近所に祖父母の家があったのですが、祖父母は瓦屋をしていて忙しく、私の面倒を見ることができませんでした。両親ともに勤め人であった我が家では、仕方なく近所のおばあさんに、両親が仕事に行っている間の私の世話をお願いしたということです。その頃は、ベビーシッターではなく、「子守りさん」と呼ばれていました。

私と子守りさんとの生活は、だいたい毎日同じでした。子守さんのおばあさんは、毎朝、決まって７時半頃に家にやってきます。そして、おばあさんと私で、自転車で仕事に行く母親を見送ります。その後は、居間の白黒テレビの前に移動します。私は、正座したおばあさんの足の上に座って、テレビを観ます。そうなったきっかけは、母親と離れて寂しがる私を、おばあさんが膝の上にのせてテレビを観させたことだったそうです。私は、おばあさんのことを「動く椅子」と言っていたそうです。

お昼ご飯は、おばあさんが料理を作ってくれて、二人で食べます。おばあさんの作る料理は、昔の料理でした。今から５５年以上前の「昔の料理」です。その中で、私のお気に入りは、「キャベツの塩もみ」でした。キャベツを千切りにして、塩をふってもむだけの料理ですが、日曜日に母親がまねして作っても、「おばあちゃんの味と違う」と、私は、ほとんど食べなかったそうです。

お昼ご飯が終わると、お昼寝をして、近くの公園に行ったり、家の庭で遊んだり。そして、夕方になると二人で玄関の所で、母親の帰りを待っていました。

おばあさんは、とても優しく、私を叱ったことは一度しかありませんでした。たった一度。その日は、私は朝からとても機嫌が悪くてイライラしていました。お昼ご飯を作っているおばあさんに、「遊んで！」と言って駄々をこねました。「今、料理しとるから、後でね。」と言うおばあさんに、私は腹を立て、いきなり後ろから、おばあさんを突き飛ばしてしまいました。いくら幼い私だったとはいえ、おばあさんは、予期せぬできごとに体のバランスを崩し、火のついた鍋に倒れ掛かりそうになりました。おばあさんは、その時、私のほっぺたを叩いて叱りつけました。私は、私が悪いことも分かっていながら、夕方まで、ご飯も食べずにずっとふてくされていました。

夕方、おばあさんは、父親と母親が帰宅するまで待って、「大切なお子様に手をあげてしまいました。申し訳ありません。」と、土間に膝と頭をついて謝っていました。

そんなことがあって、しばらくして、あのおばあさんは家に来なくなりました。そのことが原因ではなく、私が幼稚園に通い出したので子守りを頼む必要がなくなったからでした。でも、私は、そのことが、おばあさんが来なくなった理由だと思い込んでいました。

時は過ぎ、私が中学生になった頃だったと思います。あのおばあさんとの生活の記憶も薄れてきたある日のこと。母親から、あのおばあさんが、病院に入院しているということを聞き、お見舞いに行くことになりました。

私の「動く椅子」は、病院のベッドの上で動かなくなっていました。

私は、あの時のことを謝らなくてはいけないと思っていたのですが、そのことを言い出すきっかけがなく、何も話すことができませんでした。「大きくなったなあ。立派になったなあ。」と言うおばあさんに、私は、「おばあちゃんの作った『キャベツの塩もみ』が食べたいなあ。」と一言だけ言いました。どうしても、それだけしか言うことができませんでした。おばあさんは、「うん、うん。」とうなづいていました。

それが、おばあさんとのお別れの日でした。

私は、時々、『キャベツの塩もみ』を自分で作ってみます。でも、何度作っても、あのおばあさんの味とは違います。キャベツの切り方？、塩の量？、もみ加減？・・・。何が違うのでしょうか？もしかしたら、料理に込める愛情なのかもしれません。もし、そうだとしたら、あのおばあさんの味には、永遠に近づくことができませんね。